

## 私たちの間に住まわれた神

出エジプト(Shemot)33:12~34:26 エゼキエル(Yechezk'el)38:18~39  
ヨハネ(Yochanan)7:1~13

はじめに

今回は、スコットと呼ばれる、主の例祭「仮庵の祭り」について学んでいきたい。ヨム・テルア(ラッパを吹き鳴らす祭り)とヨム・キプール(大贖罪日)が厳粛な雰囲気のある例祭なら、その次にくる仮庵の祭りは喜びに満ちあふれた祝祭であり、それが一週間続く。この祭りの最たるテーマは「仮庵」である。ユダヤ人は、ヨム・キプールが終わると、すぐさま仮庵作りに取り掛かるのである。ユダヤの伝統的な教えでは、モーセが二度目にシナイ山から降りてきた後、人々は神に命じられた通りに幕屋を造り始め、それは、ちょうど、この仮庵祭の時期であったという。仮庵の祭りの一日目はティシュリの月の15日、つまり、14日の夕暮れから翌日の夕暮れまで、その日を安息日として仕事をせずに聖会を守る。そして、七日間仮庵の中で生活した後、八日目にも仕事を休み、安息日として聖会を開くのである。聖書には、以下のように記されている。

「『イスラエル人に告げて言え。この第七月の十五日には、七日間にわたる主の仮庵の祭りが始まる。最初の日には聖なる会合であって、あなたがたは、労働の仕事はいっさいしてはならない。七日間、あなたがたは火によるささげ物を主にささげなければならない。八日目も、あなたがたは聖なる会合を開かなければならない。あなたがたは火によるささげ物を主にささげる。これはきよめの集会で、労働の仕事はいっさいしてはならない。』レビ記23:34-36<新改訳>」

仮庵の祭りに関する、聖書の教え

聖書では、この祭りを祝う目的について、次のように教えている、

「『あなたがたは七日間、仮庵に住まなければならない。イスラエルで生まれた者はみな、仮庵に住まなければならない。これは、わたしが、エジプトの国からイスラエル人を連れ出したとき、彼らを仮庵に住ませたことを、あなたがたの後の世代が知るためである。わたしはあなたがたの神、主である。』レビ記23:42-43<新改訳>」。この箇所によると、一週間、仮庵の中で暮らすというのは、主なる神がイスラエル人をエジプトから救い出してから四十年間、イスラエル人が仮庵の中で暮らしたことを後の世代に伝えるためだということである。

主は、エジプトから救い出されたイスラエルの民に、四十年間どのように生活したのかを覚えなさい、と教えられた。実際に、創世記から出エジプト記12章までの内容を除いて、トラー全体が教えているのは、イスラエルの民が荒野でどのような生活をしたのか

ということであると言っても過言ではない。そのような生活の中で、神の御教え、命令、おきてなどが与えられ、また、過酷な自然の中での食糧問題、水問題、さらには周囲の敵との戦いなど、実にさまざまな試練があったのである。そんな中での彼らの住居は移動式で、それは安定した住まいではなかった。

しかし、彼らは畑を耕すことも、衣を作ることも、狩りをしたこともなかった、ただ、神から与えられるものを受け取っていただけだった。敵との戦いは、常に神の全能なる力によって守られた。四十年間の荒野生活は、奇跡的な生活であった。興味深いことに、イスラエルが約束の地に入ると、あまり奇跡的なことは起こっていない。つまり、荒野での生活、仮庵での生活こそ、神が共におられる奇跡の連続であったと言えるのである。仮庵の祭りは、そのようにイスラエルが荒野で神に守られたことを覚えて、また、それを次世代に伝えるためのものなのである。

## 四つの植物

仮庵の祭りを祝うのに、欠かせないものがある。それは、四つの植物である。聖書には、こうある。

「『初日には立派な木の実、なつめやしの葉、茂った木の枝、川柳の枝を取って来て、あなたたちの神、主の御前に七日の間、喜び祝う。』レビ記23:40<新共同訳>」

仮庵を造り、そこに、こうした四種の植物を飾るのである。では、これらの植物について説明したいと思う。

この四つの植物を羅列すると、Etrog/エトログ(立派な木の実)、Lulav/ルラフ(なつめやしの葉)、Hadasim /ハダシム(茂った木の枝)、Aravot /アラヴォト(川柳の葉)である。ラビたちは、これらの植物は人の性質をたとえていると言う。

### 1. エトログ(立派な木の実)

香りが良く、また食べられる。これは、知恵があって(トーラーを学び)、また、それを行っている人に例えられる。

### 2. ルラフ(なつめやしの葉)

食べられるが、香りが無い。知恵はあるが(トーラーを知っているが)、行いが無い人を表す。

### 3. ハダシム(茂った木の枝)

いわゆるミルトスと呼ばれるものである。食べられないが、香りは良い。これは、良い行いはしているが、知恵のない人を表している。

### 4. アラヴォト(川柳の葉)

食べられないし、香りもない。つまり、知恵も行いもない人のことである。

以上のことは、マタイの福音書13章3節から9節で、主イエスが教えられたことを思い出させる。

「イエスは多くのことを、彼らにたとえて話して聞かされた。『種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると鳥が来て食べてしまった。また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。また、別の種はいばらの中に落ちたが、いばらが伸びて、ふさいでしまった。別の種は良い地に落ちて、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだ。耳のある者は聞きなさい。』<新改訳>」

神は、どのような人であっても愛される。良いことをなかなか行えない人にも、神の愛は注がれているのである。私たちの救いは、行いによるものではない。主にあって、いろいろな人がいるわけで、誰でも最初から知恵があるわけではない。土地を耕したことがある人ならお分かりだと思うが、土地とは、続けて耕さない限り、石やいばら、雑草などに妨げられて、種をまくことができないのである。何度も土地を耕して、それらの障害物を取り除いて良い地にしていかなければならないのである。また、続けて世話をしなければ、まいた種が芽を出して、大きく成長し、実を結ぶことはできないのである。主イエスは、次のように言われた。

「イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。『天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。麦が芽生え、やがて実ったとき、毒麦も現われた。それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。』』マタイ13:24~30<新改訳>」

仮庵の祭りに必要な四つの植物について、ラビたちの教えと主イエスのたとえ話とは、一脈相通ずるところがあると思われる。救われて、すぐさまトーラーを学び、それをよく守る人というのは、あまりいないと思う。もちろん、それができる人がいるなら、それは素晴らしいことである。しかし、聖書は、被造物である私たち人間は弱いものである、ということを一貫して教えている事実をも、心に留めていただきたい。一見知恵に満ちているようで、そうではないのは、間違ったトーラーの解釈をもって間違った行いをするのであろう。福音書の全体、特に共観福音書と呼ばれるマタイ、マルコ、ルカによる福音書は、主イエスのトーラーに対する正しい解釈を教えている。主イエスとパリサイ派の

人々、律法学者たち、サドカイ派の人々との対立は、いつでも、トーラーをどのように解釈するのかという問題によるものだったのである。

マタイの福音書15章とマルコの福音書7章を見ていただきたい。食事の前に手を洗わなかった、主イエスの弟子たちを非難したパリサイ人や律法学者たちに対して、主イエスはトーラーに対する正しい解釈を示している。それは、トーラーでは、食前に手を洗わないときよい食べ物（レビ記11章参照）が汚れる、とは教えていない、ということであった。この規定は、神の教えではなく、長老たちの教え（口伝律法）であった。しかし、そうになると、今度は次なる誤解が生ずることもある。

「口にはいる物は人を汚しません。しかし、口から出るもの、これが人を汚します。（マタイ15：11）」

と主イエスが教えられるとき、「主イエスによって、何でも食べることが許されたのだ」と思い、レビ記11章の食事規定(コシェル)が破棄されたと解釈すると、これは間違ったトーラーの解釈になってしまう。ユダヤ人にとって、レビ記11章に記されていないものには、はじめから食べ物という認識はないのである。例えば、一部の人々が犬の肉を食べる習慣のある韓国では、犬の肉は食べ物のカテゴリーに一応入れられる（食するのは少数であっても）。しかし、日本や欧米諸国の人々は、犬を食べ物とは考えないのが普通である。こうした食べ物は、どの国にも多かれ少なかれ思い当たるものがあるのではないか。これと同じように、聖書の民であるユダヤ人の考え方を理解しようとするなら、聖書の食事規定というものがよく分かるようになると思うのである。主イエスも、使徒パウロも、食事の規定が破棄されたとは教えていない。

しかし、こうした食事規定を含めた、さまざまなトーラーの御教え、命令を守らなければ救われない、ということを行っているのでは決してない。先ほども言及したように、救いの道はただ一つ、メシア・イエシュアの尊い血潮のみである。トーラーを守るということは、神の民に入れられてからの、つまり、救いを得てからの話であって、それは信徒としてのきよい生き方をすることを意味しているのである。神が望んでいらっしゃることは、誰もが、きよい者として生きることである。そこには「ユダヤ人だから、異邦人だから」という区別はない。親が子供に願うことは、我が子らしく、また、神の子どもらしく生きることであり、そのために親は子に神のみことばを学ばせるのであろう。神の私たちへの御思いもまた同じなのである。

神の国においては、誰でも同じく神の愛を受ける。しかし神に仕える者は、神に、より喜んでいただける生き方がしたいと思うものである。その「神を喜ばせる生き方」こそが、トーラー・ライフスタイルなのである。

主イエスとのかかわり

仮庵の祭りは、主イエスの再臨から始まる千年王国にかかわる祭り、と考えられている。そこで、まず取り上げたいのは、主イエスの初臨(生誕)との関連性である。毎年12月25日のクリスマスには、世界中のクリスチャンが、救い主イエス・キリストの誕生日として、この日を祝う。しかし、これは、決して聖書から発した祝祭ではない。クリスマスは、古代ローマ時代からの教会が伝統的に祝ってきたもので、その日付も聖書に基づくものではなかった。その時期は、同時代に異教の偶像崇拜の祭りを祝った時期と重なっている。この時、祭りがすり替わってしまったようである。そうした矛盾が表れていることの一つに、世界の教会教派の祝うクリスマスの日付が違うことが挙げられる。例えば、カトリックを中心とした西ローマ教会は12月25日で、エチオピアン正教会とロシア正教会は1月7日、アルメニアン教会は1月6日である。欧州では、寒い冬に入るこの時期に行われていた土着の異教的なフェスティバルをキリスト教の中に取り入れ、それを主イエスの誕生日として祝うようにしたのである。その結果、このような日付不定のクリスマスが生まれてしまったのである。

ちなみに、主イエスの復活を祝う「イースター」という日の名称も、聖書からのものではない。この時期に行う祭りとして、聖書に記されているのは、過越の祭りである。実際、イースターとは、聖書に出てくる偶像のシンボル、アシェラに由来する女神の名前である。恐ろしいことだとは言えまいか。サタンは、主の復活を祝うという聖書的な祝い事の、その名前の中にも巧みに入り込み、神の御言葉を正しく学べないように働いているのである。もし、過越の祭りが慣れないなら、せめてイースターをやめて復活祭とだけ呼んだ方がまだ良いのではないか、と思われる。

では、聖書の中で、主イエスの誕生日がいつであるかの記述を見つけることはできるのか。それはYESだと言える。ただ、ここで明確にしておきたいのは、それは、はっきりとした日付が記されているということではなく、それを推察できるような記述があるということである。しかし、そのことは、私たちが認めざるを得ない事実であることは確かであろう。

まず、あるメシアニック・ジューは、ルカの福音書に記されている、バプテスマのヨハネ誕生の背景を調べると、それが理解できると言う。同1章36節には、

「『ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。』<新改訳>」

とあり、主イエスとヨハネの年齢の差は6か月であることが分かる。ヨハネの父はザカリヤという祭司であり、アビヤ組に属している。彼は神殿に入っている時（これは至聖所ではなく聖所であったと思われる）、神の御使いに出会い、子どもが授かることを告げられた。こうしたことを考えると、ザカリヤが神殿の務めをしたのはいつごろであったかという事実が、主イエス誕生の期日を知る鍵を握っていると言えるのである。歴代誌第一24章には、祭司の組とその順番が記されている。

「ダビデは、エルアザルの子孫のひとりツアドク、およびイタマルの子孫のひとりアヒメレクと協力して、彼らをそれぞれの奉仕に任命し、それぞれの組に分けた。エルアザルの子孫のほうが、イタマルの子孫よりも一族のかしらが多かったので、エルアザルの子孫は、父祖の家のかしらごとに十六組に、イタマルの子孫は、父祖の家ごとに八組に分けられた。彼らはくじを引いて互いにそれぞれの組に分かれた。聖所の組のつかさたち、神の組のつかさたちは、エルアザルの子孫の中にも、イタマルの子孫の中にもいたからである。レビ人の出の書記、ネタヌエルの子シェマヤが、王とつかさたち、および祭司ツアドクとエブヤタルの子アヒメレク、それに祭司とレビ人の一族のかしらたちの前で、それらを書きしるした。エルアザルの父祖の家を一つ一つ、イタマルのを一つ一つ。第一のくじは、エホヤリブに当たった。第二はエダヤに、第三はハリムに、第四はセオリムに、第五はマルキヤに、第六はミヤミンに、第七はコツに、第八はアビヤに、第九はヨシュアに、第十はシェカヌヤに、第十一はエルヤシブに、第十二はヤキムに、第十三はフパに、第十四はエシェブアブに、第十五はビルガに、第十六はイメルに、第十七はヘジルに、第十八はピツェツに、第十九はペタフヤに、第二十はエヘズケルに、第二十一はヤキンに、第二十二はガムルに、第二十三はデラヤに、第二十四はマアズヤに当たった。これは主の宮にはいる彼らの奉仕のために登録された者たちで、彼らの先祖アロンがイスラエルの神、主の彼に命じられたところによって、定めたとおりである。1 歴代24:3-19<新改訳>

祭司職が24組あったということから、1年間を24組で分けて、その職に就いたとすれば、一組が一年間15日(タルムドによると一度に七日間で二度努めることと、例祭には皆が参加すると伝える)務めたことになる。アビヤ組は八番目であるので、第二神殿時代のザカリヤも同じ時期にその務めをしたと考えて計算すると、バプテスマのヨハネは過越の祭りの期間に生まれたことになる。そして、その半年後の主イエスの誕生は、ちょうど、仮庵の祭りの時期になるのである。

また、ルカ2章1節から7節には、次のようにある。

「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレオパがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、身重になっているいなづけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。<新改訳>

これは、ローマ皇帝アウグスト(BCE 63～14 CE)の勅令に従い、多くの人々が住民登録のために自分たちの故郷に帰ったように、ヨセフとマリヤもベツレヘムに上っていったが、宿屋が混んでいたため、畜舎で子どもを産んだ、という記述である。ローマ皇帝が属

国民のユダヤ人に住民登録をさせる目的は、税金をさらに取るためである。つまり、税金を取れる人数の計算をするために住民登録するようにしているのだから、この登録時の移動だけで、それほど宿屋が混んだとは考えにくい。ベツレヘムの宿屋に人々が混雑するような状況を考えるなら、それは、祭りの時期以外にはないのである。つまり、この時、主の例祭があったので、エルサレムから近いベタニヤとその周辺の町は混み合い、また、ベツレヘムにも人々が押し寄せて混雑していた、と考える方が自然である。

また、12月という時期は、季節的に羊飼いの人々が夜勤するような時期ではない。イスラエルの冬も日本と同じく寒く、野宿するような季節ではないのである。よって、夜中に羊を外に放して見守るといことは考えられない。彼らが夜中に外にいたとすれば、それは仮庵の祭りに関連したことによってであった、と考えるのが一番ふさわしいと思われる。仮庵の祭りには、多くのいけにえが捧げられていたので、それらの動物はほとんどベツレヘムから連れて行かれていた。したがって、主イエスの誕生を最初に目撃した羊飼いたちは、仮庵の祭りに当番をしていた人たちであった。仮庵の祭りの時期は秋で、まだ寒いという気候ではないから、彼らは夜、そこで野宿することができたのであろう。

さらに、この箇所の「飼葉おけ」というところに注目していただきたい。この言葉は、ギリシャ語で「φάτνη(ファトネ)」といい、一般に「飼葉おけ」と訳されているが、ルカの福音書13章15節では、この言葉は「(牛やロバの)小屋」と訳されているのである。このことは非常に興味深い。旧約聖書と呼ばれるタナク(トーラー、ヌヴィイム、ケテュヴィム)にも同様に、仮庵はヘブライ語で「スカー(הכור(スカー))」(レビ23:42)、家畜の小屋も同じくスカーということが記されている。

「ヤコブはスコテへ移って行き、そこで自分のために家を建て、家畜のためには小屋を作った。それゆえ、その所の名はスコテと呼ばれた。創33:17<新改訳>」

これらのことを考え合わせると、前述のルカの福音書1章36節は、次のように解釈できるであろう。「仮庵の祭りに多くの人々が集まってきたので、宿屋には空き部屋がなかった。しかし、マリヤとヨセフは祭りのためにつくられていた仮庵に泊まり、そこで、マリヤは子どもを産むことができた。そして、仮庵の祭りに捧げるいけにえを見張るために、夜、野宿していた羊飼いたちに、メシアの知らせが与えられた」と。

ところで、マタイの福音書2章には、メシアを訪ねてきた東方の博士たちの記述があるが、これは何を意味するのか。主イエスがお生まれになった時、つまり、赤子として生まれたばかりの時に、既に彼らが東方から訪ねてきていたと考えるのはナンセンスである。彼ら(おそらくバビロン捕囚時代に連れて行かれたユダヤ人の子孫で、ラビたちであろうと思われる)は、既にお生まれになっていたメシアを探しにイスラエルに来たのである。つまり、彼らは星を見て、その星がメシアの誕生を教えていると判断して、やって来たのである(民数24:17)。それは、彼らがイスラエルのメシアを待望していたことを物語っている。星が現れたとき、彼らはメシアがイスラエルに来られたことを喜び、長い旅路を経

てイスラエルのエルサレムまで来たのである。しかし、彼らを待っていたのはメシアではなく、当時、ユダヤを支配していたヘロデ王であった。その時、ヘロデ王は、彼らが星を見つけた時間を突き止め、メシアを殺そうと、二歳未満の子どもたちを皆、殺したのである。したがって、東方からの人々が星を見たのは、その二年前ということになる。また、彼らが、メシアを探しにベツレヘムに行こうとした時、彼らが東方で見た星が再び現れて、彼らを案内した。そして、彼らは「その家にはいて、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ(マタイ2:11)」。この時、彼らは小屋にではなく、「家」に入ったのである。このようなことから、東方から来た人々は、主イエスの誕生時ではなく、しばらく時がたってからやって来たと考えられるのである。

さらに、ヨハネの福音書1章の御言葉である。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。ヨハネ1:14<新改訳>」

この箇所は、主イエスの誕生が仮庵の祭りの時であった、ということをおぼせさせる。「住まわれた」という表現は、まさに仮庵の祭りにふさわしいものである。なぜなら、仮庵の祭りは、神が私たちのところに住まわれたこと、また、将来住まわれることを祝う祭りだからである。マタイ、マルコ、ルカの共観福音書の特徴は、主イエスの例え話とし（奇跡）であるが、ヨハネの福音書には、主の例祭とメシアとの深いかわりが描かれている。ヨハネは、例祭の記述とからめて、主イエスの教えとし（奇跡）を記しているのである。主の例祭とメシア・イエシュアとの関連性は、聖書全体から考察しても、非常に大事なテーマと言える。ユダヤでは、伝統的に、創世記がティシュリの月の出来事であると考えられているが、ヨハネの黙示録を見ると、その内容がティシュリの月の時期を示す内容であることは明らかである。このようなわけで、使徒ヨハネがユダヤ的な考え方で、メシア・イエシュアと主の例祭とのかかわりを描いていることは、非常に聖書的なことと思われる。ヨハネの福音書1章は、メシアの初臨と創世記1章を重ねて表現しており、それは、彼が主イエスを神ご自身であると思っていることの証しである。また、神ご自身がその例祭の中で現そうとされているメシアの御業について、彼が十分理解していたことが伺えるのである。

## 結び

この仮庵の祭りは一週間続くが、前述したように、最初の日には普段の労働をせず、安息する。そして、七日間仮庵で暮らすのだが、六日間は普段どおりの生活をしながら、仮庵で暮らすことになるのである。八日目には、安息しながら聖会を開くように命じられている。そして、このような仮庵の祭りの初めの日に、主イエスがお生まれになり、八日目の日は、主イエスが割礼を受けられた日ということになるのである。私たちの間に御霊とし



て住まわれた主イエスが、いつか再びこの時期に来られ、実際に、ご自身が私たちの間に住まわれることを信じて、信仰の道を歩んでいきたいと思う。